

はこだてし おおふねびーいせき
函館市 大船B遺跡 (登録番号 B-01-247)

所在地：函館市大船町435-3ほか

発掘原因：国道278号函館市尾札部道路建設工事

発掘面積：4,094㎡（Ⅲ層），2,319㎡（Ⅴ層）

発掘期間：令和3年5月7日～令和3年12月8日

調査主体：函館市教育委員会

調査実施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団

担当者：函館市教育委員会 福田 裕二，小林 貢

調査者：（一財）道南歴史文化振興財団 荻野 幸男（調査担当者），三上 英則，高橋 昇

調査の概要

大船B遺跡は、函館市大船町に所在する入美川左岸と大船村上川右岸との間、標高約40～45mの海岸段丘に位置している。調査区北西端に位置する大船村上川は現在、枯れ沢となっている。調査区中央からやや西側には駒ヶ岳a軽石層（昭和4年降下）で埋没した沢があり、この軽石層を除去すると礫層の広がりとは多量の湧水が見られた。礫層からは近代と縄文時代の遺物が混在し、少量出土した。調査区北端から70mほどで急崖となり、海岸線までの距離は約200mである。同じ海岸段丘上には、調査区から200mほど南東の入美川左岸に大船D遺跡、北東400mほどに大船F遺跡が所在している（図1）。

調査は縄文時代前期以降の遺物包含層（Ⅲ層）と、駒ヶ岳火山灰[Ko-f・g]（Ⅳ層）の下にある縄文時代早期の遺物包含層（Ⅴ層）について実施した。試掘調査の結果、調査区北西側の一部ではⅤ層の堆積がみられないこと、出土遺物は調査区南東側に限られることから、Ⅴ層調査は埋没した沢の右岸について行った。また、調査の工程上、調査区を5分割し作業を行った（図2）。

Ⅲ層調査

Ⅲ層の調査は4,094㎡について行った。検出した遺構は、竪穴建物跡41軒、竪穴状遺構2基、土坑152基、柱穴状土坑118基、落し穴3基、屋外炉8基、焼土13カ所、剥片集中12カ所、集石1カ所、焼骨片集中5カ所、獣魚骨を含む貝殻の小ブロック5カ所である。遺構は、埋没した沢の左岸南東緩斜面（調査区②・③の一部）と、入美川左岸の北東緩斜面（調査区①・④の南側）に集中している。竪穴建物跡の大半は重複し、一部は土坑とも重複して検出された。主体となる時期は後期初頭である。土坑は自然堆積で埋没するものと埋め戻しとみられるものがあるが、墓と断定できるような遺物等は出土していない。柱穴状土坑の多くは、調査区②の北側に集中している。剥片集中は全て珪質頁岩製で、石器製作跡や廃棄場所と推測される。貝殻の小ブロックは、岩礁性のタマキビを主体としている。

遺物は調査区のほぼ全域にみられた。土器は縄文中期（サイベ沢Ⅴ・Ⅵ式・見晴町式）、後期（天祐寺式、涌元式、堂林式）、晩期（大洞式）、続縄文時代（恵山式）が出土している。主体となるのは後期初頭の天祐寺式・涌元式である。また調査区②南西端の沢部分からは、中期の一括土器（サイベ沢Ⅴ式・Ⅵ式）や北海道式石冠などが多く出土した。石器類は石鏃や石槍、スクレイパーのほか、石斧、擦石や石皿などが出土した。遺物総数は約70,000点である。特徴的な遺物としては、青龍刀形石器や岩偶がある。

Ⅴ層調査

Ⅴ層の調査は2,319㎡について行っている。検出した遺構は、土坑11基、柱穴状土坑12基である。遺物は調査区④を中心としてその東西に広がり、調査区①東端付近にも集中域が見られた。土器は（川汲式、ノダップⅠ式、住吉町式、東釧路Ⅳ式）、石器類は石鏃、スクレイパー、松原型石匙、トランシェ様石器、石斧、擦石、石錘、石皿など約1,200点が出土している。早期前葉の川汲式土器（日計式）は、縄文地に横位平行沈線文を施す破片の纏まりと、重層山形文などの押型文を主体とする纏まりが見られ、それぞれ数十片出土している。早期末の東釧路Ⅳ式土器は、復元可能な数個体が出土している。また石製品としたなかに、円刃の石斧状を呈し頭部側に穿孔（穿孔部で欠損）されたものがある。

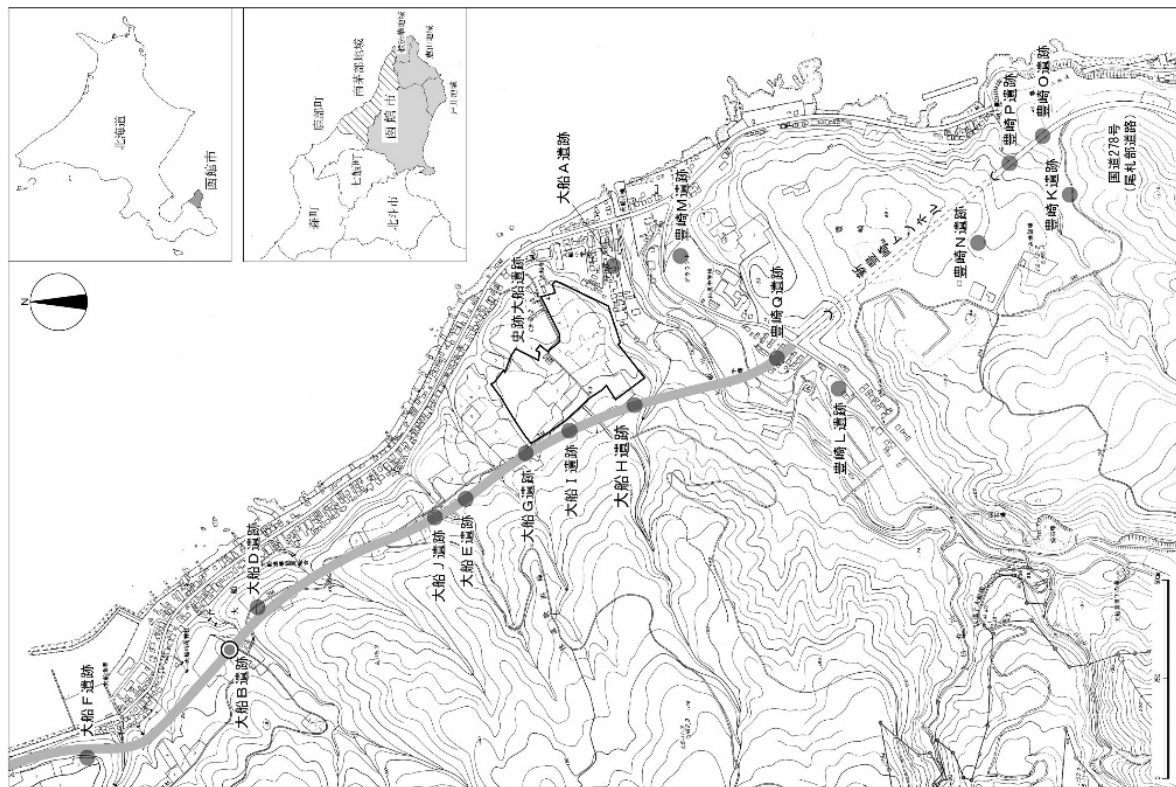


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

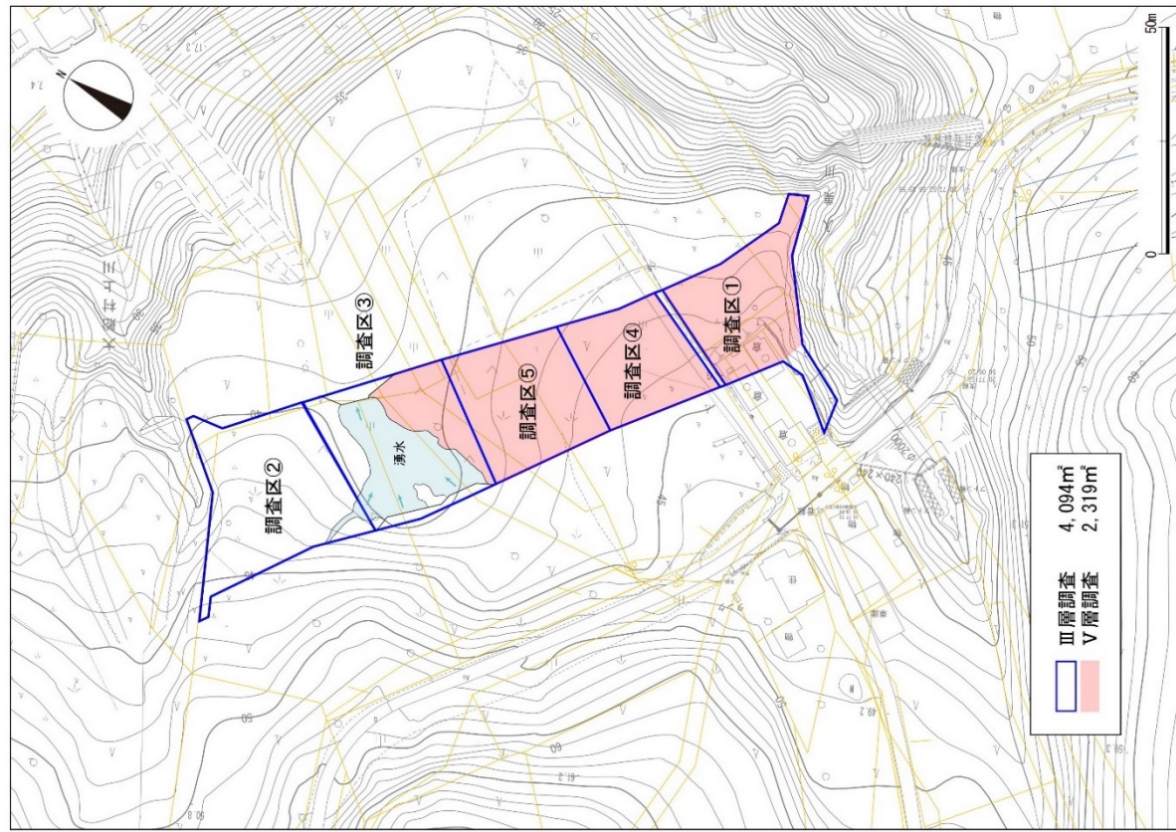


図2 調査区と周辺の地形